

片田舎のロマンス

静かな川面に平たい石を投げると幾度も飛び撥ね君は喜んだね
橋の欄干で初めてくちづけをした祭りの帰りの夜のことだった
川はいつでも僕等を見ていた　そして僕等は川を見て生きていた
流れる流れる時の川は流れゆく　片田舎のロマンス呑み込みながら

高校が終わったら君は勤めに出ていった僕は都会の大学へ通った
「離れてもお願いよ、心はあなたのもの」　ごめんよ僕の心は他の人のもの
地図にも載らないようなこの町でも男と女が川を見て生きていた
流れる流れる時の川は流れゆく　片田舎のロマンス呑み込みながら

「優しさって何かしら」君はふと僕に聞いた「残酷なものさ」と僕は答えたね
とても残酷な言葉を僕は君に告げていた「いつまでも僕たち友達でいようね」
人間の歴史はいつの時も繰り返し　川の流れを見つめる人がただ違うだけ
流れる流れる時の川は流れゆく　片田舎のロマンス呑み込みながら